

丁真をめぐる社会現象に関する考察

一生配信による有名性の継続という視点から

LIANG Chen

本研究は中国の丁真という青年をめぐる社会現象を研究対象とする。丁真は中国の内陸部、四川省カンゼ・チベット自治州理塘県に住む、ごく平凡なチベット族の青年であった。2020年11月11日に、プロの撮影者が丁真を撮影して、7秒のごく短い動画をTikTokに投稿した。2時間後、動画の再生数は一千万回を超えた。どうして特殊な才能や知識を持っておらず、良い顔つきをしているだけの丁真が、その後わずか2週間ほどの短い期間において、ネットを通して有名人になれたのだろうか。この問いに答えるのは本論文の目的である。本論文の構成は以下の通りである。

第一章では、丁真現象に関する先行研究を検討した上で、仮説を設定した。丁真を対象とする先行研究は主に、丁真個人の特殊性、またはジェンダーと経済学の視点からこの問いに答えている。それに対して、本研究においては、丁真現象はインターネット時代において普遍性があるか、その普遍性をメディア社会学の視点から捉えられるかという視点からこの問いを検討する。

この問いに答えるため、即時的なコミュニケーションが遠距離で実現できる生配信のようなメディアがネット時代に出現したことにつれて、ファンと有名人の間に関係性の変化が発生して、丁真はその新しい相互関係に適応してきたので、有名性を得たという仮説を設定した。この仮説を検証することで、有名人とファンの新しい関係を究明する。そのため、ファンとの間に即時的なコミュニケーションが発生した丁真の初配信に注目し、そのコメント欄の内容を会話分析する方法を選んだ。

第二章において、丁真に関する社会現象の全般的な経緯を説明した。それを踏まえて、第三章において、初配信前後の状況を説明した。その中で、丁真というキャラクターを形容するため、ファンがもっぱら「甜野」という言葉を創造したことを丁真の人気のピークとして注目した。キャラクターとしての丁真の愛らしい特徴は、丁真自身ではなく、ファンが創出したことを指摘した。その創出過程に、シミュレーションとしての有名人に対するファンの追求、メディアコミュニティを通じて構築されたキャラクターとしての有名人の補完と、ファンが抱えている遊びの気持ちが見出された。

2020年11月12日以前、丁真は一時的な話題にすぎなかったが、この日以降、「甜野」の創造につれて、丁真の有名性が確かるものになった。その転機になったのは、丁真の初配信であること

を第四章で指摘した。第四章では、会話の主導権、進行の方式、目的という三つの側面から丁真の初配信の特殊性を指摘した。その上で、ファンのコメントによって疑似的な視線が作られたと仮定して、コメント内容と形式を別々に分析した。

第五章において、本研究の成果をまとめた。本論文で得られた知見は次の通りである。

第一に、初配信におけるファンのコメントの内容について、恋と告白の話し、身体的特定部分の観察・接触要求という二つの初会に不適切な話題に注目した。恋と告白の話しの分析によって、有名人に対してファンが抱えている自己完結の恋愛感情と、真正の感情を表すのではなく、一種の文化団体のコードとして読み解ける告白を発見した。そして、カメラ視点の内面化による想像の喚起、有名人の身体の断片化と相対化が、身体的特定部分の観察・接触要求の分析を通じて見つげられた。

第二に、コメントの形式に関する分析は主に、生配信のコメントと「2ちゃんねる」を代表とする掲示板という二つのメディアの比較によって行った。様々な共通点がありながら、異なったコミュニケーション環境が作られた点について、名無しさんとファンの区別、見守っている有名人の存在、多層化したメディア空間のファンのあり方という三つ原因を指摘した。それらによるコミュニケーションの良好な環境の維持も、有名人としての丁真とファンのコミュニケーションの成功条件の一つである。

以上を踏まえて、第三に、本論文の結論を説明する。まず強調したいのは、有名人のイメージは実体とシミュレーションに分けられて、ファンはメディアで有名人のシミュレーションを追求していることである。追求の過程で、ネット時代のファンは、多様な手段で有名人のシミュレーションの創造者になりつつある。この虚構ゲームに熱中しているファンは有名人の断片的な情報を収集して、それを素材として、個人なりに有名人のキャラクターを再構築した。そのため、有名人を対象とする見方も変わってきている。個人によって構築されたキャラクターに私的感情を投げかけることを目指すが、その私的キャラクターの構築は常に仲間としてのファンコミュニティの補完に頼っている。そのおかげで、ファン同士の絆がキャラクターの共有によって強化され、一種の文化団体になる傾向がある。その文化団体は単一のメディアに存在しているのではなく、多層化したメディア空間において、団体の成員がファンとしてのアイデンティティと行動様式を保持している。それに対して、有名人は統一性を持っているファン団体のまなざしに徐々に抵抗しにくくなり、自己の相対化によってシミュレーションを演じるようになってくる。意図的ではないにもかかわらず、生配信を行った丁真は、このような変化した関係に適応したため、有名性を継続できたと考えられる。

最後に、今後の課題を提出した。有名人表現に対する観察の不足と、ファンコミュニティの存在はファンと有名人の個人関係に影響を与える経緯を究明しないことという本研究の不足点を指摘した。その不足点を踏まえて、これからは、コミュニケーションの有名人の表現と、有名人の存在をめぐって、ファンコミュニティとファン個人の関係二つ方向に着目して、研究を更なる一歩深めるこ

とにする。